

私と北野高校

～血肉骨となった北野高校と先生～

いはら のりかつ
井原 功勝 (21期)

人生は出会いである……。私は北野高校で立派な先生方や良い友人に出会い、貴重で楽しい時期を過ごす事ができた。毎日学校へ行くのが楽しみであった。一階の講堂で撮った卒業写真を虫眼鏡で一人ひとり拡大して眺めていると、当時の事がつい先日の事のように懐かしく浮かんでくる。今、みんなどうしているだろうか。



毎日新聞大阪本社での仕事

朝、阪急京都線相川駅から天神橋行きに乗り、途中淡路駅で京都から来る梅田行きの急行に乗り換えて梅田駅に。阪神百貨店の前からその裏手にあったバラック建ての衣類を扱う問屋街を通過して、桜橋に出て毎日新聞大阪本社に8時30分過ぎに到着。編集局で記者や編集者の指示で印刷局や関係部の間を、記事・写真・凸版・ゲラ等を運んだり、鉛筆を削ったり、原稿用紙を準備したりするのが仕事であった。当時、新聞社には編集局運動部に、三段跳びの金メダリスト南部忠平さんと平泳ぎ金メダリストの葉室鉄夫さんが勤務していた。

学芸部には時々、作家の山崎豊子さんが顔を出した。「バナナボート」を歌ったアメリカの黒人歌手ハリーベラフォンテが、新聞社を訪問のときにはサインを貰った事もあった。山崎豊子さんの原稿は、身体に似ず大きく確りした美しい文字で書かれていた事。

今上天皇と美智子様のご成婚の際は、事前に特集記事が極秘扱いで組まれていた事。釜ヶ崎で暴動が起こった時は、社会部の記者が扮装して潜入取材をしたこと等々、中学出たてで世間知らずの私にとっては、見る事聞く事全てが新鮮な日々であった。

一路北野高校へ

仕事は午後4時に夜勤の者と交代。風呂に入って、4時半過ぎに退社。阪急電車で梅田駅から十三駅へ。西口改札を出て給料日などに、時々酒饅頭を買って帰った和菓子屋「喜八洲(きやす)」の店の前を通過して三叉路の信号を渡り、ホテル街を抜けて十三公園へ突き当たったところで、道路を渡って校門に到着。校門を入ると右側はプール、左側はテニスコート。プールの周囲はソメイヨシノ、テニスコートの周囲にはボタン桜が植えられていた。グラウンドに続く道の両側には、躑躅が植えられていた。春はソメイヨシノが咲きボタン桜が続き、そして躑躅が毎年鮮やかな花を咲かせた。雨が降った後などは街灯の下で躑躅の甘い香りが漂っていた。

学校生活

体育の時間には水泳の授業もあった。縦50メートル横25メートルのプールは当時の高校では珍しかったのではないかと思う。水泳大会も行なわれ、私は25メート

ルバタフライで学年一位となり、バッジを貰ったことがあった。プールの横を通り過ぎると食堂があった。毎日5時10分頃には食堂に着いて軽い夕食をすませた。何を食べたか思い出せないが、多分、うどんや菓子パンなどではなかったろうか。そこで一息入れて教室へ向かった。

授業は5時半から9時まで。7時過ぎに20分ほど休憩時間があった。時間割は、1時限は5時30分～6時15分。2時限は6時20分～7時05分。3時限は7時25分～8時10分。4時限が8時15分～9時00分だったと思う。授業は真面目に聞いていたが、時々猛烈な睡魔に襲われた。先生には申し訳ないと思いながらも、睡魔に負けてしまった事がしばしばあった。教室のあちこちで見かけられたこの様な光景を先生はどのように見られていたのだろうか。

授業以外でも多彩

級友には武田、藤沢、田辺等製薬会社やシャープや三菱電機、久保田鉄工に努める人、工場の経営者等、業種・職種も色々で、年齢もかなり年上の人もいて多士済々であったが、みんな真面目で人の良い、心優しい人ばかりであった。春休みや夏休みには学校に集まり、ガリ版刷りの文集を作ったり、体育祭の時は放課後や休みの日に出て来て看板作りや応援の練習をした。

誰かが言い出して年末にお金を出し合い、餅つきをして、施設に贈った事もあった。又、森本先生とクラスのみんなでよく六甲山にハイキングに行った。神戸三ノ宮へ下山の途中に見た“百万ドルの夜景”が夕闇の中で、キラキラと輝き素晴らしかった事。六甲縦走のあと有馬温泉で登山の疲れを癒した事等、同級生達との楽しい思い出は尽きない。さらに、山岳同好会と出会いも忘れられない思い出である。職員室の奥に小さな部屋があり、世話役の志水さんがおられた。休み時間にはいつも山仲間が集まりよく談笑をしていた。体育の中沢先生や藤井先生も加わり、夏は北アルプス登山、冬はスキー、3月は比良山の雪中登山など、あちこちへ連れて行ってもらった。今何とか元気で過ごせるのはその時の鍛練のお蔭だと思っている。

勉強の方は、英語は多田先生、日本史・世界史は田安先生、数学と物理は岡田先生、生物・化学は森本先生、体育は中沢先生、藤井先生、音楽は宝塚歌劇団でも教えていた先生に教わった。先生方は皆さん本当に熱心に教えて下さった。

岡田先生の言葉

中でも岡田先生と森本先生には特にお世話になった。岡田先生は1年から4年までの担任だった。入学した最初の日先生は私達に、「諸君達は昼間働き夜学ぶと言う、普通の高校生とは違う毎日をこれから4年間送る事になるが、ここを卒業して将来立派な人間になって、諸君達のような境遇の人がなくなるような世の中にして欲しい。そして、社会に役に立つ人間になって欲しい。」と独特のとつとつとした口調で話された。私は今でもその時の言葉が忘れられない。先生は音楽が趣味で音楽室には、先生自身が制作された大きなスピーカーが添え付けられていた。シューベルトの組曲《麗しき水車小屋の娘》《冬の旅》を解説付きで聞かせて頂いた事もあった。クラシックをじっくり鑑賞したのは初めての経験で、何か少し賢くなったような気がした。シューベルトの曲を聴くたびにその時の光景が浮かんでくる。先生には数学と物理を教わった。 Σ (シグマ)、 ε (イプシロン)、 \int (インテグラル) 等々専門用語が次から次へと黒板に並んだ。4年の微分・積分や物理の授業はお手上げとなってしまったが、

先生に対する尊敬の念はますます高くなった。後年、先生は姫路の方の大学教授になられたとの話を聞いたが、今どうされているだろうか。

森本先生、人生の恩人

森本先生は私の人生の恩人である。考えてもいなかった大学への進学が、今からでも勉強すればできると言っただけで背中を押して下さったのが森本先生で、2年から卒業まで副担任としてお世話になった。生物と化学を教えて頂いた。京都大学の理学部を卒業された後、高槻の医大の研究室で助手をされていた。私達は高校卒業後も医大の研究室で、入試の勉強を見て頂いたり、朝まで入試問題を解いたり大変お世話になった。

2年浪人して大学に合格できたのは、一重に先生のお蔭である。先生は気さくで良き兄貴のような存在であった。面倒見が良く、先輩、後輩を問わず先生を尊敬し慕う生徒が、いつも先生の回りには沢山集まった。先生は昭和44年頃に研究のためにニューヨーク大学に移られ、そしてそこで生涯を終えられた。級友の荒木不二夫君が会社の出張の際に大学を訪れて、先生に再会することが出来たそうだが、私は結局、その後一度もお会いする事が出来なかった。先生は今、天王寺のお寺に眠っておられる。4年前の北辰会報に18期生の先輩方10名が森本先生のお墓にお参りされた時の様子が報告されていた。遅まきながら私も近いうちにお墓参りをしたいと思っている。

一期一会を大切

私が北野高校に行く事になったのは本当に偶然であった。父の失業で中学の卒業を間近に控え急遽就職をせざるを得なくなった。遅い就職活動ではあったが、運よく毎日新聞社編集局給仕として採用された。新聞社は夜間高校に行くことを推奨していた。北野高校は中学の担任の先生が薦めて下さった。もし、そのまま昼間の高校に進学していたら……。もし、就職したところが毎日新聞社でなかったら……。もし、定時制高校に行っていなかったら……。もし、北野高校に行っていなかったら……。もし、森本先生に出会っていなければ……。

私にはどんな人生が待っていたのだろうか。人生とは不思議である。私は今年3月に古希を迎えた。6年前にサラリーマン人生を卒業し、出会いはめっきり少なくなったが、これからも良い出会いを求めて一期一会を大切にしていきたいと思っています。

(2014年発行、東京北辰会だより6号より転載)

*事務局より

この原稿を読ませて頂いた時から会報に転載したいと思いお願いをしていました。北辰会の70歳を超えている人達には特に胸に滲みる話だと思えます。しかし、これは現在の若い世代の人達にも心に響く真理を持っていると考えました。井原さんはマスコミ関係でなく金融関係のお仕事に就かれました。